

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称      博士（医 学）      氏 名 河野 公美

主査 教授    大滝 純司  
審査担当者 副査 教授    玉腰 暁子  
副査 准教授   伊藤 陽一  
副査 教授    荒戸 照世

## 学 位 論 文 題 名

北海道大学の留学生のうつ傾向に関する研究

(A Study on Depressive Symptoms of International Students of Hokkaido University)

申請者は、北海道大学の留学生の精神保健の管理・維持・向上に貢献することを目的として、北海道大学の留学生における「うつ傾向」およびその関連因子について検討を行った。

審査会では、4人の審査担当者より以下の質疑応答がなされた。

大滝教授より、第1章に小活を設けた理由、および第2章と第3章を分けた理由について質問があった。申請者は、前者については文献レビューのまとめを行うためであり、後者については論文の読みやすさを考慮したと答えた。それに対して大滝教授より、論文作成の手引きに従い章は分けずにまとめた方が良いとの指摘があり、申請者はそのように修正すると回答した。

玉腰教授および伊藤准教授より、マルチレベル分析のモデルの選択結果は妥当であるのか、また、その際のランダム効果を導入する変数の選択方法について質問があった。申請者は、前者についてさらに検討すると回答し、後者については交互作用項を用いた分析結果との比較ができるよう変数を選択したと答えた。さらに、図1-1～図1-3については、%表示だけではなく分母を追加するよう指摘があり、申請者はそのように修正すると回答した。

伊藤准教授から、マルチレベル分析の結果で示された適合度の数値に誤りがあるのではないか、また分散の「標準偏差」ではなく「標準誤差」が正しい、との指摘があり、申請者は確認して修正すると回答した。

続いて、玉腰教授から、「睡眠の質」および「住居の快適さ」は主観的指標であり、うつ傾向の原因だけでなく結果（症状）を反映している可能性があるのではないかと指摘があった。申請者は、その可能性があるため検討して修正すると回答した。また、CES-Dは

うつ傾向を過大評価することが指摘されていることから、「留学生の約4割にうつ傾向が認められたという事実を認識すべきである」との結論が適切であるかどうかについて質問があった。これに対し申請者は、データの限界など追記し、さらに検討すると回答した。

次に、荒戸教授から、本研究で得られた睡眠時間とうつ傾向との関連性が「先行研究と概ね一致している」とあるが、具体的にどのような点が一致していたのかとの質問があった。申請者は、一部が一致しているということであると回答したが、荒戸教授より、より詳細に記述する必要があると指摘があった。申請者はさらに検討して修正すると回答した。また、居住年数とうつ傾向との関連性に関する先行研究は、対象者の特徴が留学生と異なるため適当ではないのではないかと、さらに、留学生の居住年数に合わせた提案を考察すべきである、との指摘があり、申請者は再度検討して修正すると答えた。

伊藤准教授より、留学生の国籍の分類を「その他アジア諸国」および「その他」としていることについて、奨学金の有無が国の経済水準に影響される可能性があるため適切な分類になっているかどうか確認すべきではないかととの質問があった。申請者は、国籍の詳細な分布を作成し確認すると回答した。また、留学生の住環境に関する提案についても、データに基づいた提案になっているのかどうか確認する必要があるとの指摘があり、申請者はデータを確認した上で提案事項を再検討すると回答した。さらに、基本属性と奨学金の単変量分析結果を示した表の百分率は、行ごとに修正すべきであるとの指摘があった。また、論文全体を通しての誤字や入力ミスについて指摘があった。申請者はそのように訂正すると回答した。

最後に大滝教授から、これらの指摘事項を踏まえて、考察の後半と総括における「研究の限界」に関する記述を拡充するよう指示があり、申請者はそのように加筆修正すると回答した。

本論文において申請者は、北海道大学の留学生を対象に、うつ傾向を指標として精神保健およびその関連因子について分析し、その知見に基づいて留学生の精神保健の現状と、その維持・向上につなげるための課題の一端を明らかにした。この成果は今後の留学生の精神保健のさらなる向上に寄与することが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。